



AI は、人間を少し大胆にする

中小企業診断士 服部 幹郎様

生成 AI というと、「業務効率化の道具」という説明がまず思い浮かびます。文章を要約する、メールを書く、資料をつくる、調べものをする。確かに便利です。

しかし最近、私は AI の面白さは、そこだけではないと感じています。

ここ数年、AI のできることは急速に広がっています。文章生成だけでなく、調査、分析、プログラミング、画像や動画の生成、さらにはパソコン上の操作まで行うようになってきました。

以前は「翻訳ならこの AI」「議事録ならこの AI」と、目的ごとに専門の AI を使い分ける印象が強かったと思います。しかし今は、ChatGPT、Claude、Gemini のような汎用 AI が、さまざまな専門機能を取り込み始めています。昨日まで「専門サービス」だったものが、いつの間にか標準機能になっている。そんな変化が起きています。

一方で、AI による生産性向上には、少し違和感もあります。

ある調査では、AI によって業務が楽になったと感じる人が約 9 割いる一方、6 割以上が「AI 疲れ」を感じていました。

仕事が 1 時間から 20 分になれば、本来は 40 分の余裕が生まれるはずですが、しかし、その 40 分に次の仕事が入る。さらに AI が進化して 20 分が 5 分になれば、今度は 4 倍の仕事を求められるかもしれません。仕事量が 4 倍になって、給料や余暇も 4 倍になるのでしょうか。そう考えると、生産性向上には出口がありません。

では、AI で増やすべきものは何でしょうか。

私は、仕事量ではなく、「試行回数」ではないかと思っています。

最近、私はゲームを作る予定もないのに、AI を使って「Unreal Engine」という本格的な 3D 開発環境を触りました。Blender などのツールや CUDA 環境なども含め、これまでなら「自分の専門ではない」と避けていた道具を、AI に聞きながら動かしてみました。別の機会には、飲食店の経営相談の場で、売上や広告費などに幅を持たせ、1 年間の収益を 1 万通り計算するモンテカルロ・シミュレーションのツールを、その場で AI に作ってもらいました。もちろん、これで私が 3D 開発や統計の専門家になったわけではありません。

面白いのは、専門家でなくても「まず試してみる」ことができるようになったことです。

従来は、「学ぶ、習得する、作る、試す」という順番でした。今は、「やりたい、まず作る、試す、必要なことを学ぶ」という順番でも動けます。特にデジタルの世界では、「どうやって」の壁が急速に低くなっています。すると、次に前へ出てくるのは、「どうやるか」ではなく、「何をやってみるか」です。そして私は、その「何」は、最初から立派でなくてもよいと思っています。

先日タイを一人で旅行したときも、AI に聞いていたのは、「これ何?」「種類が多すぎるけど、おすすめは?」「この料金、騙されていない?」といった、小さなことばかりでした。しかし、その小さな使い方のおかげで、知らない場所でも一歩踏み出しやすくなりました。

世の中には、じゃがいもにメッセージを書いて送るサービス、嫌いな相手にラメを送るサービス、ゆるい猫の絵を描いて送るサービス、「Yo」とだけ送れるアプリなど、一見すると「そんなものが何になるのか」と思うようなアイデアから、実際にビジネスになった例もあります。

「くだらない」と「価値がない」は、同じではありません。

価値は、試したあとに見つかることもあります。私自身、最近観葉植物のそばに小型コンピュータとカメラを置き、植物の視点から「今日の飼い主日記」を AI に書かせる仕組みを作っています。

朝からパソコンに向かっていて、今日は水をくれない、帰宅が遅い。そんな様子を植物が勝手に日記にしてくれたら、少し面白いのではないかと思います。

役に立つかどうかは分かりません。でも、今はそれでよいと思っています。

もう一つ、AI を使うほど感じることもあります。

AI が「どうやって」を引き受けてくれるようになるほど、人間側の「何をやりたいのか」「なぜそれをやるのか」が、以前より重要になってきます。何に違和感を持つか。何を面白いと思うか。誰のどんな困りごとを解決したいか。そこには、その人がこれまで仕事をしてきた中で得た経験や、失敗した記憶、人との付き合いの中で感じてきたことが効いてきます。つまり、AI が進歩すると、人間の経験が古くなるのではなく、むしろ経験を別の形に変換しやすくなるのではないかと思います。昔なら「思いついたけれど、自分には作れない」「専門家に頼むほどでもない」と消えていたものを、その場で AI に相談し、試作品にし、人に見せることができる。そこで初めて、「これは使える」「これは違う」「だったらこうの方がいい」と次の考えが生まれます。私は、そこに大きな価値を感じています。

AI は、知識や作業量を増やすだけの道具ではありません。これまでなら流していた思いつきや違和感を、「ちょっとやってみる」へ変える道具でもあります。

「AI は、人間を少し大胆にする」。私は、そういうことではないかと思っています。